

4. 1 ルーブリック評価

本校では生徒の資質・能力をはかる指標のひとつとして独自のルーブリックを作成し、定期的に評価を行っている。ルーブリックは本校で育成したい生徒像でもあり、これを用いた面談も行いながら、総括的評価としてだけでなく、形成的評価として活用し、生徒の目標設定等に活かしている。ここではルーブリックの推移を分析し、本校生の特徴や学年ごとの特徴等について考察する。

(1) はじめに

平成27年度に開校した本校では、「未来創造型教育」を目指すグランドデザインの下、開校直後4月、教員全員による教員研修会(本校では「未来研究会」と称する)を実施した。県下全域から赴任した教員集団はそれぞれの想いを抱きスタートを切った。そこで、新しい学校・教育としての「育成したい生徒像」としての共通イメージを持ち、互いに意思疎通を深めていくために、ワークショップ形式での意見交換会を行った。

開校当時、入学してきた子供たちの8割は原発事故で避難を強いられた地域の出身であった。子供たちの状況は多様だが、数カ所の避難先を転々とし、学力に課題を抱えている子供も多かった。また、避難する中で不登校となってしまった生徒も存在した。一方で、地元への愛着や、世界からの支援に対する感謝の気持ちから、社会に貢献したいという意欲の強さも感じられた。「この子供たちが卒業する3年後に、どのような姿になっていて欲しいか」教職員全員が付箋に書き込み、出し合いながら議論を重ねた。

研修後、「育成したい生徒像」に必要な「育成したい能力」を分析し、共通項をまとめると同時に、本校の校訓である「自立」「創造」「協働」を意識し、福島県双葉郡教育復興ビジョン、OECD キーコンピテンシー等の内容を踏まえ、本校のルーブリックを作成した(巻末関係資料参照)。

ルーブリックの言葉の一つ一つに、教職員の感覚や想いが反映されている。例えば、「寛容さ～異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとする事ができる」という項目である。この地域は今、放射線の安全性に関する考えが違う者同士の衝突や、避難した人と帰還した人の中での気持ちのすれ違いなどに直面している。考えの違う人を排除しても地域復興はままならない。仕事をする上でも生活をすることも、考えの違う他者との関わり合い無くして成り立たない。考えの違う人を説得していく交渉力と

言うより、異なる考えも受け入れ、ユーモアを持って接し、包み込んでいく「あたたかさ」が必要であると私たち教職員は考えた。この力が土台となって、別の項目に定義された「他者との協働力」が発揮される。

また、「表現・発信力～どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる」という項目も同じように教職員の想いが詰まっている。震災や原発事故のバックグラウンドを否応なく背負ってしまった子供たちは、世界中のどこに行っても意見を求められる。その時、言葉を発せず沈黙すれば、風化や風評に繋がっていく。例え突然指名されたときでも、自分の言葉で語れることが大切だ。話し相手のバックグラウンドも考えながら、定量的なデータの説明や定性的な復興のストーリーを組み合わせ、情緒にも働きかけながら相手の心を動かす力が求められる。

開校して真っ先に行ったのが、このルーブリックの設定である。目指す資質・能力を明確化して、その目標に向けて学校をあげて取り組むために、よそから借りてきた表面的な言葉では無く、自分たちの視点・言葉で定義することを重視した、学校全体の欠かせない出発点である。指導の重点の設定も、授業の展開も、学習の評価も、学校評価も、このルーブリックと関連づけながら展開していくことを目指している。

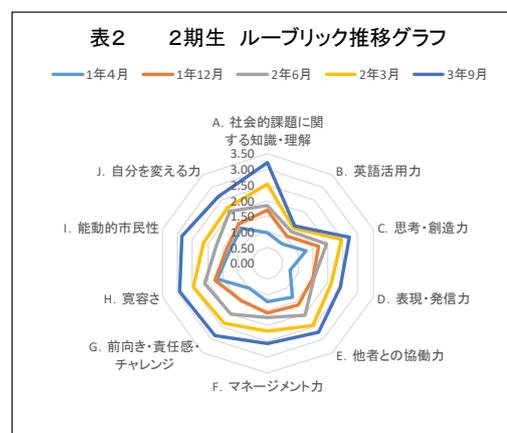
開校から7年が経過し、ルーブリック評価は学校に定着している。当初は年度終了時に生徒がどの程度資質能力を伸ばしてきたか検証する、いわゆる「総括的評価」として使ってきた。しかし、ルーブリック評価は本来生徒個人が活用すべきものであるという考え方から、生徒ひとりひとりにフィードバックし、その先の目標設定等に活かすような「形成的評価」として使うため、ルーブリック面談を導入した。面談は手間がかかるものの、メタ認知の向上にも役立っていると思われ、生徒、教員共に好意的に捉えている。また、2年間かけてルーブリックの改訂を行い、令和3年度からCの思考・創造力をC-1思考力、C-2創造力と分けて運用している。

(2) 1期生（平成27年度入学生）から8期生（令和4年度入学生）のルーブリック評価（表1～8, 図1～8）

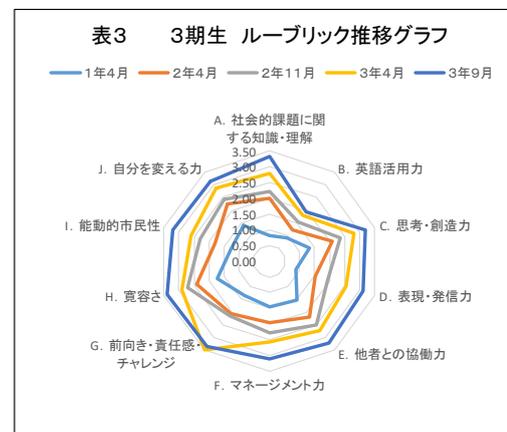
	1年4月	1年7月	1年3月	2年2月	3年1月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.65	1.43	1.87	1.88	2.48	
B. 英語活用力	0.50	1.00	1.17	1.14	1.26	
C. 思考・創造力	0.74	1.32	1.78	1.94	2.43	
D. 表現・発信力	0.64	1.28	1.47	1.42	1.83	
E. 他者との協働力	0.85	1.59	1.77	1.80	1.90	
F. マネージメント力	0.84	1.37	1.75	1.71	1.96	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	0.62	1.03	1.50	1.43	2.04	
H. 寛容さ	1.06	1.73	1.98	1.77	2.07	
I. 能動的市民性	0.66	1.17	1.36	1.57	1.91	
J. 自分を変える力	0.78	1.38	1.78	1.81	2.04	
平均	0.73	1.33	1.64	1.65	1.99	



	1年4月	1年12月	2年6月	2年3月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.98	1.70	1.85	2.52	3.20	
B. 英語活用力	0.78	1.05	1.25	1.39	1.46	
C. 思考・創造力	1.28	1.70	1.98	2.47	2.71	
D. 表現・発信力	0.75	1.51	1.54	2.10	2.40	
E. 他者との協働力	1.35	1.66	2.04	2.45	2.73	
F. マネージメント力	1.23	1.60	1.73	2.17	2.55	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.00	1.45	2.00	2.35	2.86	
H. 寛容さ	1.66	1.77	2.11	2.47	2.95	
I. 能動的市民性	1.27	1.39	1.73	2.13	2.84	
J. 自分を変える力	1.40	1.56	2.04	2.19	2.63	
平均	1.17	1.54	1.83	2.22	2.63	



	1年4月	2年4月	2年11月	3年4月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.83	1.99	2.21	2.80	3.33	
B. 英語活用力	0.93	1.23	1.54	1.79	1.95	
C. 思考・創造力	1.34	2.07	2.37	2.81	3.18	
D. 表現・発信力	0.89	1.51	1.92	2.55	3.09	
E. 他者との協働力	1.51	2.18	2.52	2.71	3.21	
F. マネージメント力	1.45	1.96	2.27	2.58	3.10	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	2.06	2.15	3.47	3.35	
H. 寛容さ	1.73	2.39	2.70	2.92	3.39	
I. 能動的市民性	1.26	1.80	2.29	2.61	3.21	
J. 自分を変える力	1.39	2.25	2.43	2.86	3.15	
平均	1.27	1.94	2.24	2.71	3.10	



	1年4月	2年4月	2年11月	3年5月	3年10月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.69	1.71	1.96	2.48	2.83	
B. 英語活用力	0.89	1.29	1.28	1.59	1.70	
C. 思考・創造力	1.27	1.68	2.11	2.49	2.77	
D. 表現・発信力	1.04	1.40	1.75	2.10	2.36	
E. 他者との協働力	1.42	1.80	2.11	2.59	2.68	
F. マネージメント力	1.49	1.71	2.04	2.43	2.64	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.19	1.54	1.84	2.40	2.72	
H. 寛容さ	1.69	2.12	2.26	2.63	2.95	
I. 能動的市民性	1.38	1.63	2.09	2.39	2.81	
J. 自分を変える力	1.51	1.95	2.17	2.48	2.78	
平均	1.26	1.68	1.96	2.36	2.62	

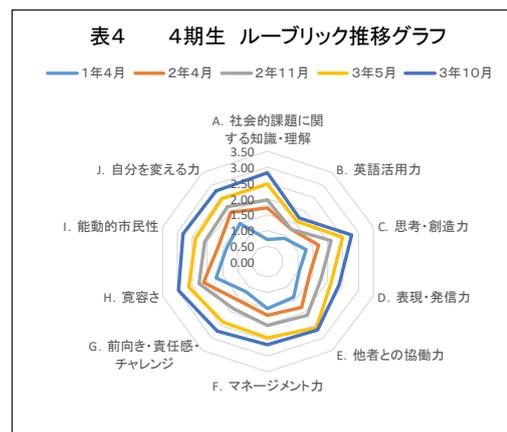


表5 5期生 ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年6月	3年1月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.43	1.70	1.94	2.98	3.04	
B 英語活用力	1.11	1.44	1.06	1.71	1.95	
C 思考・創造力	1.91	2.18	2.04	2.87	3.13	
D 表現・発信力	1.52	1.72	1.64	2.51	2.69	
E 他者との協働力	1.93	2.02	1.94	2.88	3.07	
F マネージメント力	1.83	1.97	1.77	2.77	2.87	
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.80	2.09	1.82	2.88	3.14	
H 寛容さ	2.25	2.31	2.38	3.15	3.15	
I 能動的市民性	1.62	1.81	1.78	2.81	2.92	
J 自分を変える力	2.16	1.98	1.91	3.01	3.04	
平均	1.76	1.92	1.83	2.76	2.90	

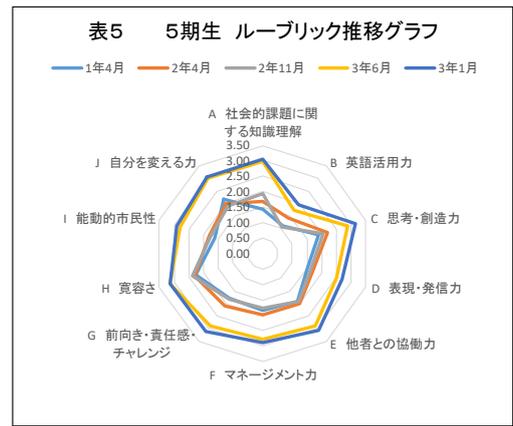


表6 6期生 ルーブリック推移表	1年4月	1年11月	2年6月	2年10月	3年5月	3年9月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.69	1.89	2.24	2.54	2.80	3.17	
B 英語活用力	1.23	1.27	1.49	1.75	1.91	1.95	
C 思考・創造力	2.05	2.07	2.45	2.67	2.85	3.18	
D 表現・発信力	1.78	1.72	1.92	2.29	2.63	2.94	
E 他者との協働力	2.15	2.20	2.23	2.51	2.79	3.14	
F マネージメント力	1.96	1.98	2.15	2.49	2.77	3.01	
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.20	1.99	2.39	2.45	2.87	3.31	
H 寛容さ	2.58	2.44	2.58	2.84	3.08	3.22	
I 能動的市民性	2.07	1.89	2.02	2.48	2.80	3.08	
J 自分を変える力	2.16	2.16	2.42	2.67	2.85	3.26	
平均	1.99	1.96	2.19	2.47	2.73	3.03	

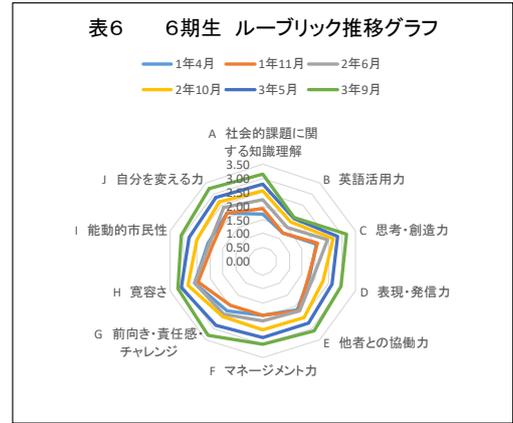


表7 7期生 ルーブリック推移表	1年6月	1年1月	2年6月	2年11月		推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.16	1.17	1.43	1.63		
B 英語活用力	1.00	1.01	1.02	1.17		
C-1 思考力	1.55	1.09	1.35	1.83		
C-2 創造力	1.62	1.01	1.38	1.77		
D 表現・発信力	1.21	1.22	1.22	1.57		
E 他者との協働力	1.50	1.47	1.61	1.72		
F マネージメント力	1.37	1.26	1.37	1.80		
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	1.14	1.11	1.69		
H 寛容さ	1.77	1.44	1.77	1.98		
I 能動的市民性	1.30	1.14	1.28	1.59		
J 自分を変える力	1.52	1.37	1.56	1.81		
平均	1.39	1.21	1.37	1.69		

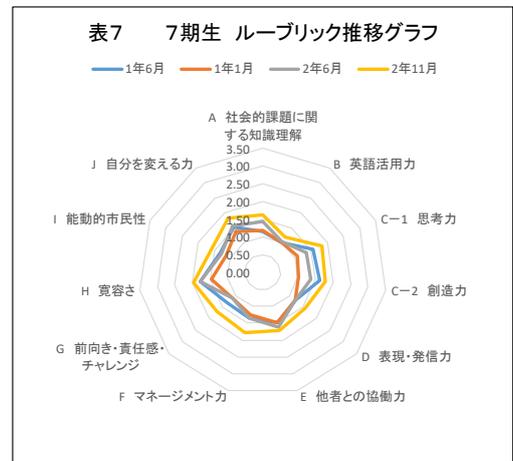
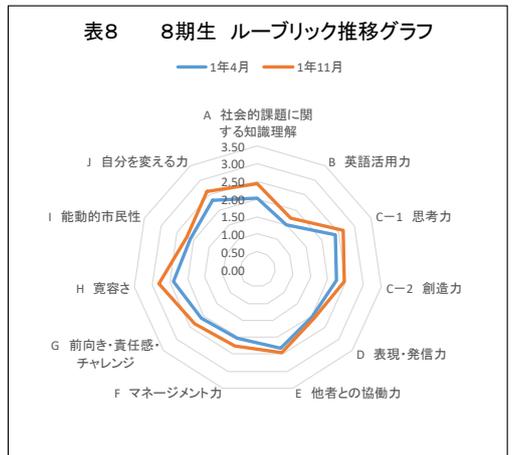
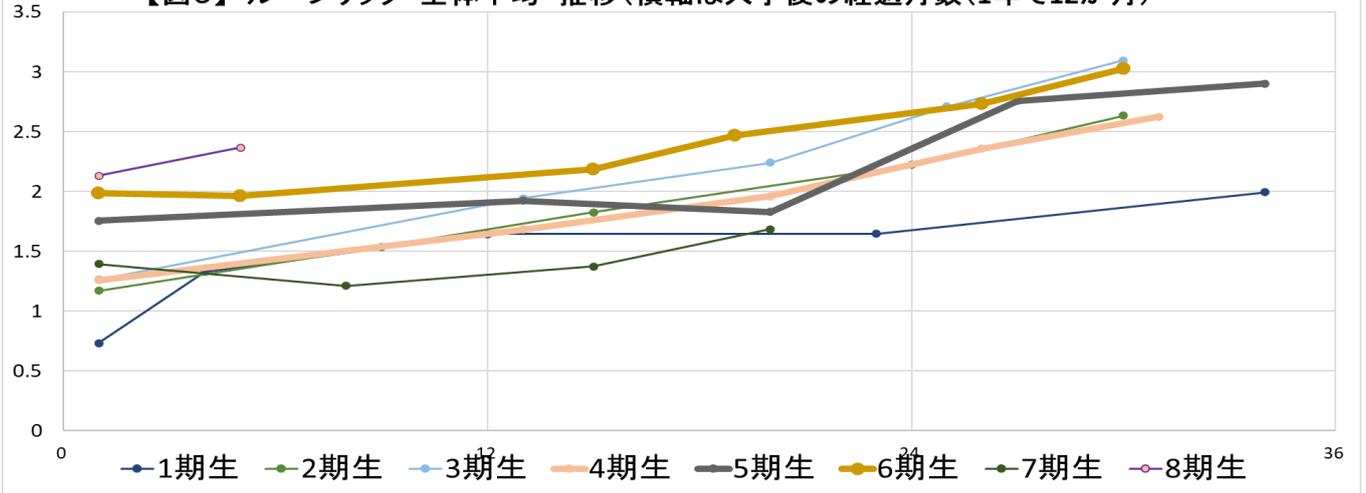


表8 8期生 ルーブリック推移表	1年4月	1年11月				推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	2.03	2.42				
B 英語活用力	1.50	1.71				
C-1 思考力	2.40	2.63				
C-2 創造力	2.26	2.47				
D 表現・発信力	2.04	2.10				
E 他者との協働力	2.32	2.44				
F マネージメント力	2.02	2.24				
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.08	2.36				
H 寛容さ	2.38	2.83				
I 能動的市民性	2.08	2.19				
J 自分を変える力	2.34	2.64				
平均	2.13	2.37				



【図9】 ルーブリック 全体平均 推移(横軸は入学後の経過月数(1年で12か月))



(3) 1期生から7期生の平均値の推移

1～8期生のルーブリックの推移について、値の全体平均値の推移グラフを(2)図9に示す。1～4期生までは1年次から3年次まで順調に値が高まっているのに対し、5～6期生は、1年次最初から値が高く、その状態をほぼ維持したまま推移している。6・7期生については、入学最初のルーブリックの数値よりも年度の途中でいったん数値が下がる傾向がみられる。これについては、1年次の演劇の学習を通じて、自分をメタな視点で見つめなおしたときに、「自分のできなさ」を厳しく現状分析できるようになったことに起因すると考えられる。

これまでのところ、3期生が3年最後の値としては最も高くなっている。2年次後半から3年次にかけて探究学習が本格的に進んでいく時期に大きく上昇する傾向があるが、6期生についてはどの時期においても比較的安定的に数値を伸ばしてきた。最終目標に掲げるルーブリックの平均3.5はかなり野心的な数値ではあるものの、今の6期生が取り組んできた探究学習を考えると、最終数値についてはもう少し上昇が期待できた。特に6期生は入学時より3年間コロナ禍の時期と重なっていた。様々な制限により自分たちが思い描いていた探究学習から変更を余儀なくされた場面も多かったが、創意工夫をしながら諦めずに探究学習に取り組んでいた生徒が多かった。このような状況はG 前向き・責任感・チャレンジ(2.20→3.31)やJ 自分を変える力(2.16→3.26)などの数値に現れている。8期生については、一貫生がいる初めての学年となった。中学校からルーブリックに3年間取り組んでいる生徒を中心に、最初のルーブリックからこれまでの年次の数値を上回っているデータが出ている。この推移を見ながら、実際の能力伸長について見極めていきたい。

(4) 8期生(令和4年度1年生)の評価

8期生のルーブリックは、全体的に最初から数値が高い。これは、中高一貫1期生(一貫生)が高校進学した学年であることが大きな影響を与えている。一貫生は、中学の3年間、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークショップや哲学対話を行っていたため、「表現・発信力」や「創造力」、「他者との協働」、「思考力」の基礎的な力が備わっている。そんな生徒たちが8期生の4割を占めており、地域創造と人間生活や探究の授業において、自分と違う他者の意見を否定せず、共に対話しながら物事の本質を捉えたり、自己を開放し他者と協働する雰囲気を作ったりすることができたことが、結果として全体の数値に現れたと言える。

一番大きく数値が伸びたところは、①寛容さ(+0.45)、②社会的課題に関する知識理解(+0.39)である。①については、生徒から「人それぞれ考え方は違う、ということをお忘れずに接するように心掛けた」「仲の良い友達とは考え方が似ているので話していて楽だが、演劇で普段話さない人と話すことで全く違う考えを知ることができ、面白かった」という意見が出た。②は、双葉郡バスツアーや取材等で地域に出て、様々な人達の人生に触れたことで、自分の中に課題意識が芽生えたようである。

高校1年次後半より、未来創造探究が始まった。今後の課題は、生徒たちが探究を通して能動的市民性を身につけるかである。さらに地域の課題を世界の課題と結びつけ、世界に発信する英語力もより一層身につけさせたい。

(5) 7期生(令和4年度2年生)の評価

7期生のルーブリック評価平均値の推移は、他年次とは大きく異なる傾向で推移している。入学後すぐ(1年次6月)の評価から、2回目(1年次11月)にかけて、今までほとんどの年次が上昇傾向にあったにもかかわらず、平均値が下がってしまっていた。これは生徒一人ひとりの自己評価が低いことに起因していると考えられる。未来創造探究の授業においてゼミ配属が決定した時点(2年次6月)までは、例年と比較しても低い数値が出ていたが、探究活動を進めプレ発表を実施した後(2年次11月)は、A~Jまですべての項目が今までで最も高い数値となり、大きい上昇傾向を見せた。これは探究活動と発表会でのフィードバックがある種のスモールステップとなり、多くの生徒が達成感を得ることができたことが最も大きな要因であると考えられる。

この結果をもとに、探究の授業内ではルーブリック面談を実施した。各ゼミ担当者が分担して、ゼミ内の生徒と1対1の面談を行うものである。生徒の自己評価が低いという傾向を踏まえ、面談前にワークシートを配布し、これまで自分が最も頑張った内容や、担当教員と話したい内容をまとめてから面談に臨むよう働きかけた。また、客観的に見て評価数値が低すぎると思われる部分について、生徒の具体的な取り組みや、PROG-Hテスト(河合塾主催:「リテラシー」「コンピテンシー」の両面から、情報収集力や課題発見力、社会で普遍的に必要とされる力を測定する)の分析結果を踏まえながら振り返った。

上昇傾向にはあるものの、全体的に見たときの数値はまだ低い。このまま3年次に向けて順調に活動を進め、進路に対する意識が高まっていけば、さらなる達成状況が期待できる。生徒が達成経験を積み重ね、自分に自信が持てるようにサポートしていく必要があるだろう。

(6) 6期生(令和4年度3年生)の評価

6期生は高校2年次までに4回、今年度2回、計6回ルーブリック評価を行っている。値を表6、グラフを図9に示した。6期生の推移は5期生の推移と似ている。時期を追うにつれ、各項目が少しずつ伸長し、3年次最後には、英語活用能力を除きほとんどが3.0~3.5の間の数値となった。数値が高い順に、G前向き・責任感・チャレンジ(3.31)、J自分を変える力(3.26)、H寛容さ(3.22)、C思考力・創造力(3.18)、E他者との協働能力(3.14)、I能動的市民性(3.08)となった。一方、英語活用能力は1.95と低い数値に留まった。経年比較では、6期生の最終平均の3.03という数値は、3期生の3.10

に次いで高い数値となった。英語活用能力については、過去で最も高かった3期生および5期生と同様だった。

1年次は、旧課程対象の1期生~7期生の中で一番高い数値で始まったが、11月には逆に全体的に下がっている。その中でも高い数値だったのは、H寛容さだった。

2年次になり個人の探究が本格的に始まり、数値が上昇し始めている。6月の時点では2.19、11月の時点では2.47となり、10月後半に実施した中間発表に向けてそれぞれの探究活動が進んだように思われる。6期生は新型コロナの影響により、外部での活動にかなりの制約があったが、ゼミ担当教員の適格な助言やオンラインの活用により、活動を進められた結果であろう。特に、2年次においては、ゼミ担当者の月次会に力を入れ、全体での目線合わせ、カタリバからの助言、過去の事例の研究、ゼミ内生徒の進捗の共有等を行った。2年次最後の数値として高い資質・能力としては、H寛容さ(2.84)、C思考・創造力(2.67)、J自分を変える力(2.67)、A社会的課題に関する知識理解(2.54)が挙げられる。また、2年次に数値の伸長が著しかった資質・能力は、I能動的市民性(+0.46)、D表現・発信力(+0.37) Fマネジメント能力(+0.34)が挙げられる。

3年次も、2年次同様コンスタントに数値が上昇している。5月はプレ発表会直後、9月は最終発表会直後の数値である。3年次は2年間に渡る探究活動の総まとめの時期であり、それぞれが課題解決のアクションや発表会に向けての内容のまとめ等を行った。3年次の全体の平均値は2.73から3.03に上昇した。最終的な数値が高くなった資質・能力は前述の通りであるが、3年次に数値の伸長が著しかった資質・能力は、G前向き・責任感・チャレンジ(+0.44)、J自分を変える力(+0.41)、A社会的課題に関する知識理解(+0.37)、E他者との協働能力(+0.35)が挙げられる。

1年次~3年次を通じ最も伸長した資質・能力は、A社会的課題に関する知識理解(+1.48)、D表現・発信力(+1.16)、C思考・創造力(+1.13)である。

4. 2 ルーブリック評価の定量的分析 (アクセンチュア株式会社)

本校において独自に設定したルーブリック評価に基づき、定期的に測定してきた。その結果を基に、アクセンチュア株式会社様と一般社団法人次世代教育・産官学民連携機構 (CIE) 様の視点から生徒の成長、変容を客観的に確認することに取り組んだ。その結果、全体的に成長している一方で、指標ごとの伸びの大きさに違いが確認できた。主に社会的課題に関する知識・理解、思考・創造力、前向き・責任感・チャレンジ、能動的市民性といった要素が成長しており、未来創造探究等の活動を通じた影響が現れていると考えられる。実際の活動内容と分析結果を比較することで、次年度以降のカリキュラム検討に活用することができる。

(1) はじめに

本校では、指導の重点の設定、授業の展開、学習評価、学校評価等をルーブリックと関連づけながら展開することを目指している。ルーブリックの指標、レベル設定は全教員で議論を重ね、自分達の言葉で定義した。4 カテゴリー(「知識」、「技能」、「人格」、「自らを振り返り変えていく力」)、10 指標を定義し、それぞれ5段階のレベル(1-5)を絶対評価になるよう設定した。

■知識: A 社会的課題に関する知識・理解、B 英語活用力

■技能 (スキル・コンピテンシー): C 思考・創造力 (7 期生からは C-1 思考力、C-2 創造力に分離)、D 表現・発信力、E 他者との協働力、F マネージメント力

■人格 (キャラクター・センス): G 前向き・責任感・チャレンジ、H 寛容さ、I 能動的市民性

■自らを振り返り変えていく力: J 自分を変える力

<データ取得タイミング>

年度/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
令和2年度	6期生 ①							②				
令和3年度	6期生		③				④				②	
令和4年度	6期生	⑤				⑥						
	7期生		③				④					
	8期生	①						②				

測定においては、自己評価に加え、生徒間ピアレビューを実施することで評価の客観性をもたせている。

データ分析はプロボノとして関わってアクセンチュア株式会社に依頼し、次項以降のデータ分析、示唆出しを行った。

(OECD 東北スクール、地方創生イノベーションスクール 2030 東北クラスターにおいて福島大学と協働でルーブリック評価をしており、その知見も活用して実施していった。)

(2) データ分析の概要

今回の分析対象は、全ての測定時に回答している学生のみとした (6 期生: 計 113 名。入学時から卒業までの推移を見るとともに、6 期生と 7 期生、8 期生を比較しながら、指標ごとの傾向、生徒の系列ごとの傾向、海外研修有無別の傾向などの分析を進めていった。

1) 6 期生・7 期生・8 期生の平均値の推移

6 期生は 1 年後半までの到達度が低かったものの、新旧に伴い大きく点数を伸ばした。7 期生では点数の伸びは 2 年への新旧とともに確認された。一方 8 期生は、1 年時の点数がいずれの学年よりも高い水準であった。

図 1



2) 全体ルーブリック評価の学年別平均比較

左より 6 期生、7 期生、8 期生の順にグラフが示されている。全ての学年で新旧に伴い多くの項目が点数を伸ばしていった。一方で、B. 英語活用力については全ての学年でどの測定時点においても他の項目と比べて最も低い点数で推移している。この傾向は 1~8 期生のすべての年次で見られる傾向である。(図 2)

図 2



(3) 所属ゼミごとの比較 (6 期生)

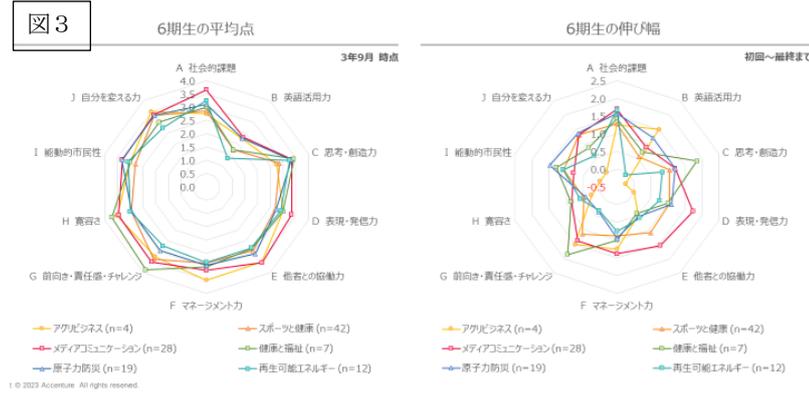


図 3 は所属ゼミごとに比較を示している。6 期生は 6 つのゼミのうち、メディア・コミュニケーション探究ゼミが「B 英語活用力」を除く多くの項目で最も高いレベルを示していた。一方、健康と福祉ゼミは、「C 思考力・創造力」および「G 前向き・責任感・チャレンジ」の伸び幅が他のゼミと比して大きかった。

(4) 入学系列ごとの比較 (8 期生)

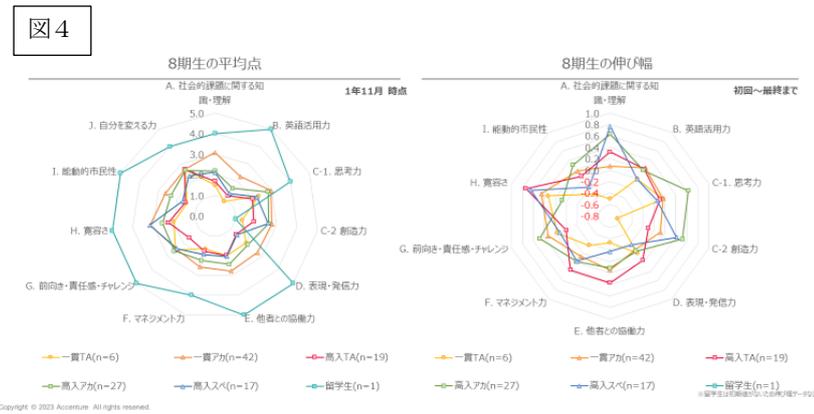


図 4 は入学系列ごとの比較を示している。8 期生は入学系列ごとにルーブリックの数値が大きな差となったため、系列ごとの比較を行った。アカデミック系列はいずれの項目でも他の系列に比べ高い水準を示した。一貫アカと高入アカを比較した場合、「A 社会的課題に関する知識・理解」や「B 英語活用力」「D 表現力」の項目では大きな差を示したが、それ以外の項目ではあまり差がなかった。伸び幅については、高入アカが一貫アカと比較して、「C-1 思考力」や「I 能動的市民性」の数値が伸長している。

(5) 各指標における成長推移 (6・7 期生比較)

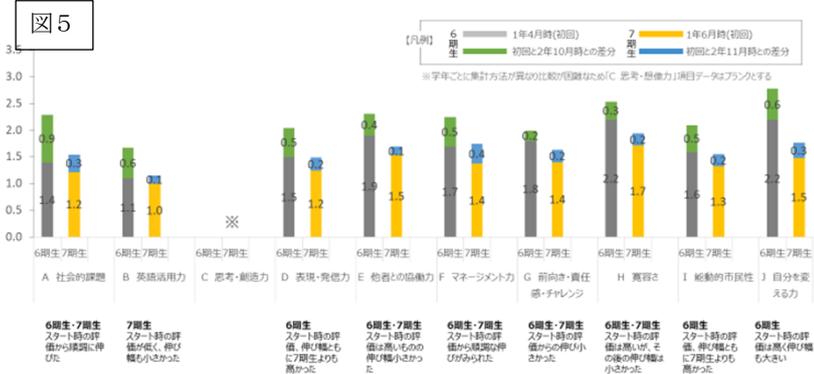


図 5 は各指標における成長推移を示し、1 年の初回測定時から 2 年 10-11 月の測定時までの成長度合いを、6 期生と 7 期生で比較した。全項目において、6 期生は 7 期生よりも伸び幅が同じかより大きいことが確認できる。6 期生は特に「A 社会的課題」の伸び率が大きい(+0.9 ポイント)。次年度については、7 期生のここからの伸長に期待している。

(6) 今後の展望



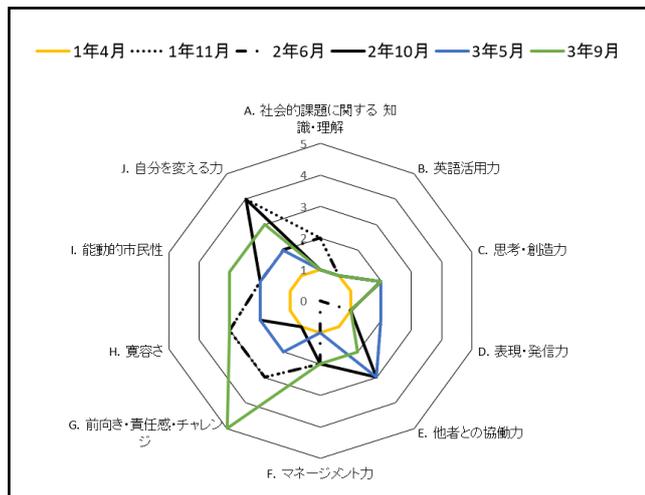
図 6 は最終的な指標別の到達レベル、及びそれまでの変化の 6 期生と 7 期生の比較を示している。今回の指標別順位の推移は、「J 自分を変える力」及び「D 表現・発信力」、「B 英語活用力」は似た傾向が確認されている。B と D の指標が低いのは SGH 指定からの懸念事項であり、英漁活用力とあわせて、「海外に向けて発信する」という施策が必要である。

4. 3 6期生の個別評価

6期生のうち、未来創造探究の各ゼミ 1～2人ずつ生徒をピックアップし、本人の活動の様子とルーブリック評価の推移について分析した。

○生徒 T.A (原子力防災探究ゼミ)

【平均値】1.00 (1年4月) →2.30 (3年9月)

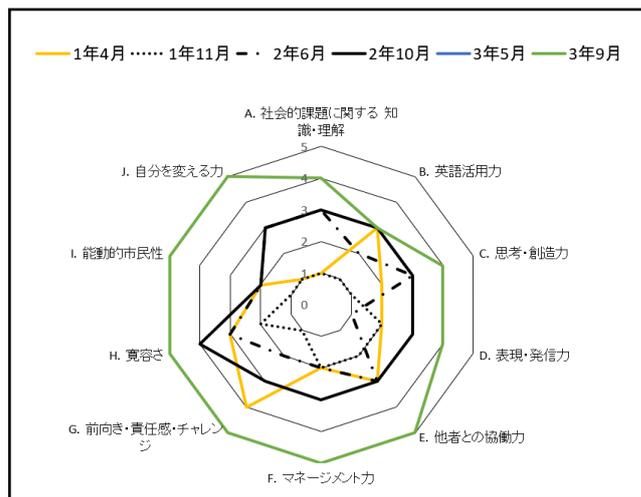


南相馬市から通うスペシャリスト系列の生徒。1年次の双葉郡ツアーや演劇を通じて平均2.4に上昇し、特に「自分を変える力」が4に。しかし、2年次の前半は探究活動がうまく軌道に乗らず、1.8で推移。特に、「他者との協働力」が0に。この頃、外部のボランティア活動に参加はしていたが、自分がどう関わるかに悩み自己評価は低い。数値には表れていないが、2年次後半に大きく変化する。マイプロ校内選考に落ち、代わりに参加したSteam フェスタ (ベネッセ主催) で自分なりの考えをまとめることができ、探究活動が進む。3年次前半の自己評価は低いが、6月頃に外部連携によるワークショップの手伝いを始めたことで活動が進み、夏にもさらに探究活動が進み、内容も精査され、最終発表会では堂々と発表でき、入賞も果たした。最終的に大きく伸びた力は「前向き・責任感・チャレンジ」となった。

○生徒 N.H (原子力防災探究ゼミ)

【平均値】2.30 (1年4月) →4.50 (3年9月)

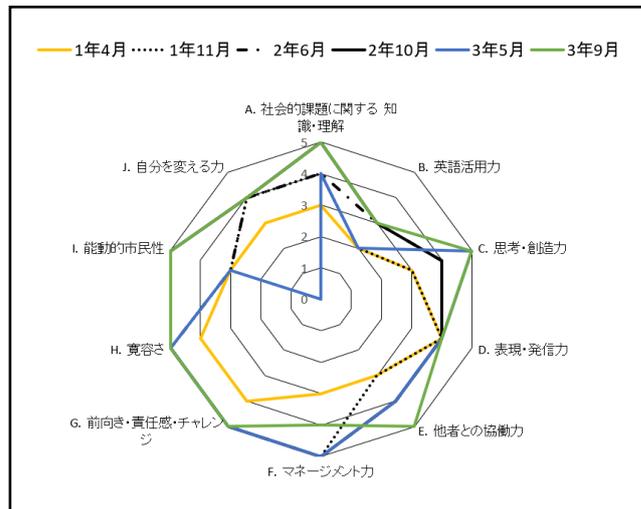
双葉郡以外から通うアカデミック系列の生徒。高校1年次が低い数値であったのは、探究の内容が決まっていなかったことが考えられる。2年次前半は探究の内容が少しずつ決まり始め、10月には実際にアクションを行ったことで「表現・発信力」「前向き・責任感・チャレンジ」



「寛容さ」が向上したと考えられる。特に、「寛容さ」が4になったのは、チームでの取り組みや地域NPOとの連携によるものだと考えられる。最終発表会時には、自分たちのプロジェクトを堂々と発表できたという点で、「他者との協働力」「マネージメント力」「前向き・責任感・チャレンジ」「寛容さ」「能動的市民性」「自分を変える力」を5で評価している。入学時に低かった「能動的市民性」「自分を変える力」は、地域の人々のためにできた、行政に提案できたという点が本生徒を大きく変えたのではないかと考えられる。

○生徒 K.H (メディアコミュニケーション探究ゼミ)

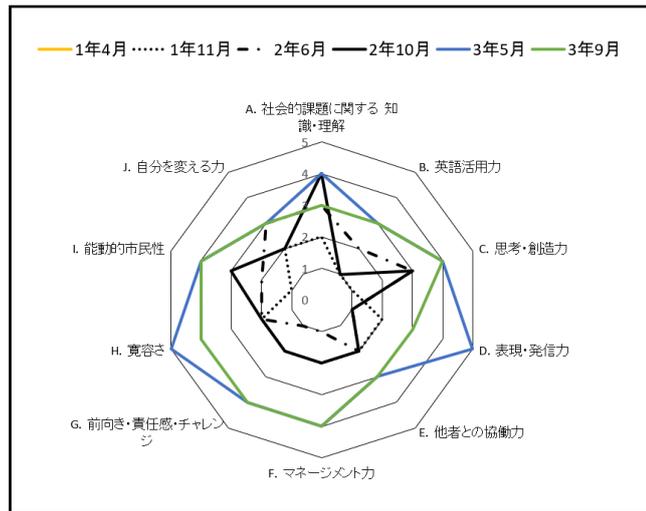
【平均値】3.20 (1年4月) →4.50 (3年9月)



本生徒は富岡町出身の女子生徒である。生理の貧困をテーマに、学校の女子トイレに生理用品を置くなど、積極的に活動を行う姿が見られた。ルーブリック評価は1年次4月より徐々に上昇している。2年6月以降に本格的に探究活動がスタートし、アンケートや調査アクションをきっかけに、A. 社会的課題に関する知識理解、I. 能

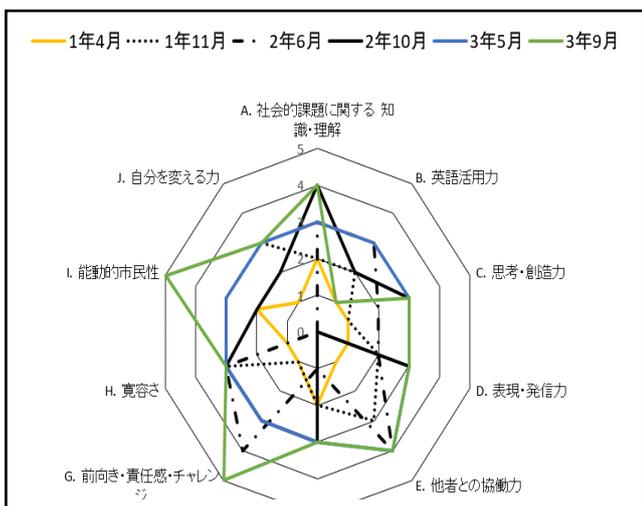
動的市民性が高まった。3年5月には評価が一時下がったが、これは探究に行き詰まった時期だと本生徒は話す。その後、友人と3人で探究を進めたことにより多様な視点で探究を行うことができ、3年9月には評価が再び上昇した。探求のサイクルをうまく回しながら、評価を徐々に高めていくことができた例であると考えている。

○生徒 N.M (メディアコミュニケーション探究ゼミ)
【平均値】 1.70 (1年4月) →3.50 (3年9月)



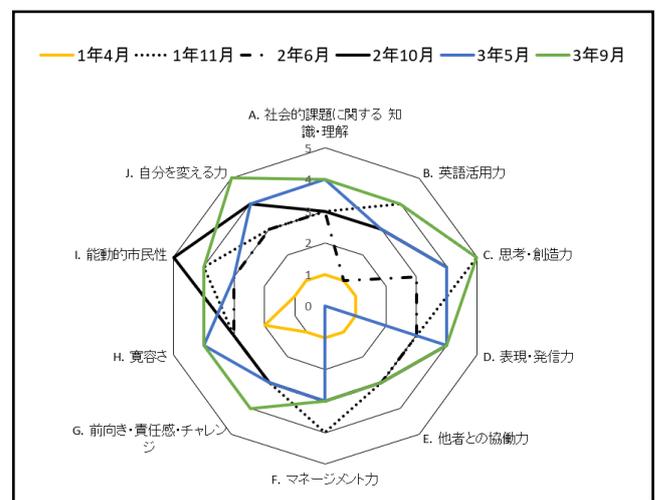
本生徒は大熊町出身の女子生徒である。ふるさとである大熊町に関する活動を行おうと考え、友人とともに母校である双葉郡大隈町立学び舎ゆめの森を訪問し、ワークショップを行った。探求活動を進めていく中で、社会のために何かできないかと考えるようになったことから「思考・創造力」「能動的市民性」が1から4に伸びている。また「英語活用力」も1から4へと伸びており、ニューヨーク研修などの活動に参加したことなどが背景にあると思われる。

○生徒 S.K (再生可能エネルギー探究ゼミ)
【平均値】 1.30 (1年4月) →3.40 (3年10月)



Sは広野町出身の男子生徒であり、高度な学びをしたいと、アカデミックコースを選択した。高校2年次より、地域を明るくするというイルミネーションを使った他の探求に合流し、再生可能エネルギーを使って灯りを灯す活動をおこなった。地域で実際にイルミネーションを設置するという探究活動を通して、地域で活動する外部の人たちと交流を続けた。その成果もあり、「能動的市民性」「前向き、責任感、チャレンジ」の項目において、高い評価へと変化してきた。様々な地域との触れ合いと、目的に向かって活動することを通して、自己肯定感が高まり、チャレンジ精神と柔軟な思考が育てられたと考えている。

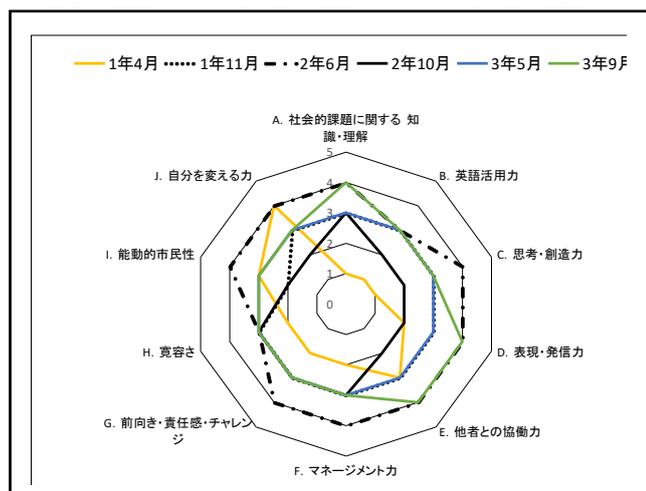
○生徒 E.S (再生可能エネルギー探究ゼミ)
【平均値】 1.10 (1年4月) →4.00 (3年10月)



Sは双葉郡出身の男子生徒であり、情報系の大学進学を希望し、アカデミック理系を選択している。高校1年次からドイツ研修をはじめとするさまざまな研修を通して学習を続けた。特に放射性物質の土壌汚染問題や放射線防御についてや再生可能エネルギー（水素）などについて積極的に情報を得ようとあちらこちらに出向いてさまざまな研修を行った。その結果、「自分を変える力」「思考、想像力」「前向き・責任感・チャレンジ」等の項目において、全体的に数値が上昇した。自己肯定感が強まり、さらに新たな課題に挑戦してみたいという気持ちのサイクルが身についたようだ。

○生徒 S.S (アグリビジネス探究ゼミ)

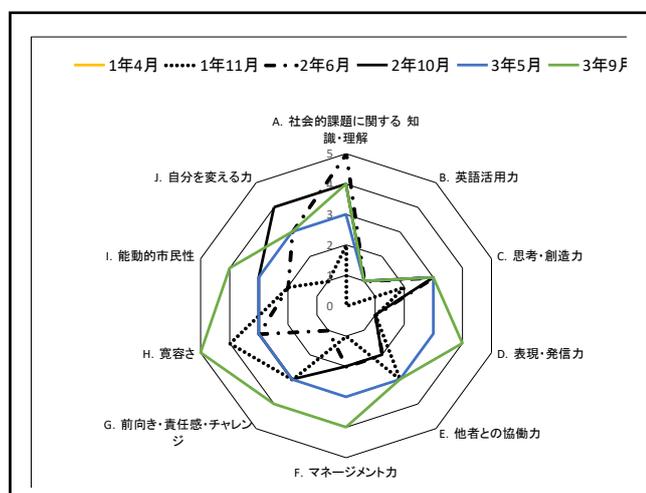
【平均値】 2.10 (1年4月) →3.30 (3年9月)



幼少期を国外(中国)で過ごしてきた経歴を持つ女子生徒である。本校社会起業部の元部員であり、カフェで廃棄されるコーヒーかすを課題視し、コーヒーかすを活用した石けん開発をテーマに探究活動を行ってきた。ルーブリック評価は「社会的課題に関する知識・理解」が1から4に変化している。変化は1年次の途中から現れ始めている。『国外生活期間があった背景から、地域課題の発見よりも先に、まずは地域について知る必要があった』と本人は述べており、関心をもって地域について調べてきた過程が、評価の変化に反映されていると考察する。将来は、海外と日本の関係における課題をビジネス面から解決したいと述べており、地域の課題解決をきっかけに、世界の課題解決に視野を広げることにつながった生徒の例であると考えられる。

○生徒 S.W (アグリビジネス探究ゼミ)

【平均値】 1.90 (1年4月) →3.50 (3年9月)

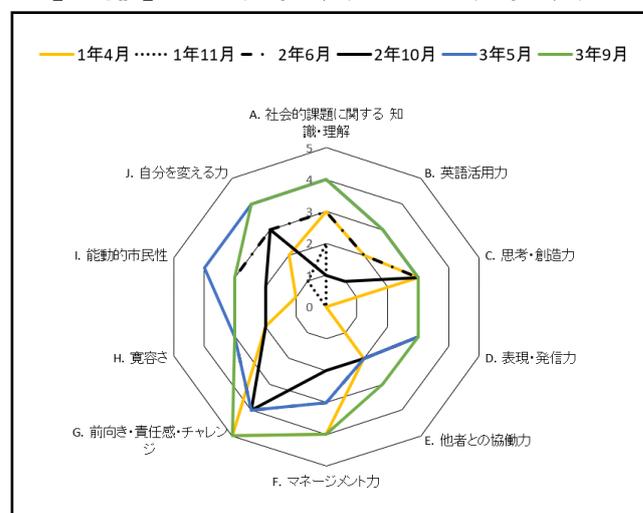


いわき市出身の女子生徒である。スペシャリスト系列

農業選択者3名から成る班に属し、エディブルフラワーの栽培とそれを活用したスイーツ開発をテーマとして、無農薬栽培法と花の加工法について模索してきた。ルーブリック評価は、「表現・発信力」が1から4に伸びている。この変化は3年次以降に急に現れている。S・Wは、3年6月に農業クラブ主催の意見研究発表会に出場しており、自分の考えを言葉で表現・発信する経験をしている。そのことがルーブリック評価の変化の背景にあると考察する。3年1月には県総合学科高校生徒研究発表会にも参加しており、「表現・発信力」を示す積極的な取り組みは評価に値する。

○生徒 Y.Y (スポーツと健康探究ゼミ)

【平均値】 2.40 (1年4月) →3.50 (3年9月)

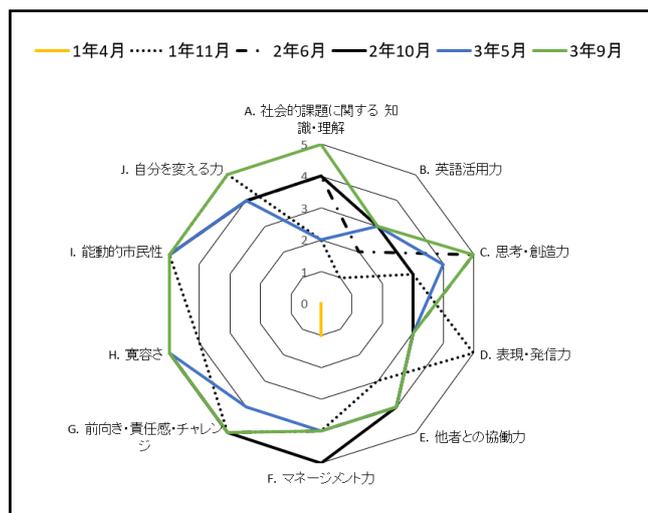


海風寮から本校に通う、トップアスリート系列で男子サッカー部に所属する生徒である。「サッカー部を通して広野町を元気にするには?」というテーマのもと、3人グループで活動を行った。男子サッカー部でも副キャプテンを務め、チームを統率する力、計画的に行動するマネジメント力に優れている生徒である。探究活動においてもグループの先頭に立ち、メンバーそれぞれの役割分担を行いながら、効率的に活動を進めていく様子が印象的だった。ルーブリック評価の内容から、特に表現・発信力の数値が大きく伸びたことが窺える。アクションを起こし、感じたこと、学んだことを周囲の人にどのように伝えるべきかを考え工夫し、発表会に臨んだ成果が数値となって表れている。また、発表会だけでなく、cafeふうと共同でイベントを企画しようと行動した際にも、そのイベントの意義や自分の意思に賛同してもらえるように行動、表現したことも成長に繋がっていると考えられる。3年次には探究活動を積み重ねていく中での社会的課題の発見・解決に向け、知識や理解を深めながら活

動することで数値を伸ばすことができた。広野町の課題を理解しながら、サッカー部として地域の活性化に向けてどんな活動が出来るのかを考え、子どもたちを対象とした「キッズコミット」を計画、開催することができた。ふたば未来学園高校サッカー部と地域を繋ぐイベントを初めて開催することができ、地域とのつながりを感じることができたと感じられる。この経験が数値に大きく影響していると考えられる。

○生徒 M.M (スポーツと健康探究ゼミ)

【平均値】 0.10 (1年4月) →4.40 (3年9月)

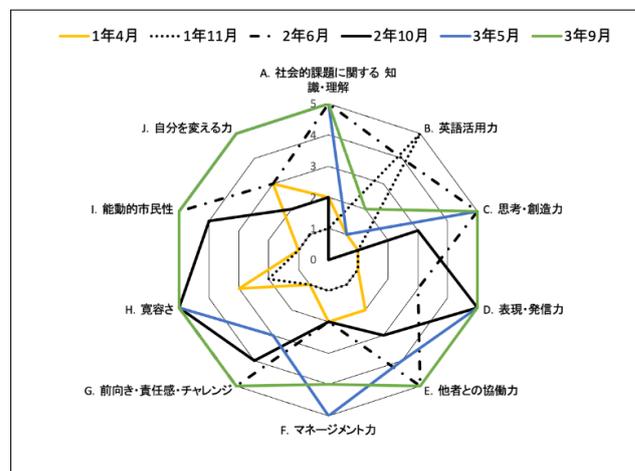


海風寮から本校に通う、トップアスリート系列で男子サッカー部に所属する生徒である。「サッカー部を通して広野町を元気にするには？」というテーマのもと、3人グループで活動を行った。基礎学力は比較的高く、どんなことにもコツコツと取り組むことができる真面目な生徒である。ルーブリック評価の内容からも、ほぼすべての項目で大きな成長を遂げていることが窺える。リーグ戦やイベントのポスターや地図を作成したり、アンケートの質問項目を検討したりとどのような取り組みがサッカー部の周知に効果的なのかを考え取り組んだ。その結果が思考・創造力の段階的な伸びに繋がっている。また、自分で作成したものを広野町内のさまざまな施設に出向いて配布し、町民の方と積極的な交流を深めることができた。その場で町民の方から広野町の現状や課題などの情報を収集することができ、その結果が社会的課題に関する知識・理解の数値の伸びにも繋がっている。町民の生の声をグループでの探究活動に反映させ、グループ内で共有していくことで、他者との協働力、コミュニケーション能力も高めることができた。最初は寡黙に取り組んでいる様子であったが、探究活動を通して仲間や先生、

地域の方々とのコミュニケーションが増え、聞く力、伝える力、自分を変える力がより一層身についた姿が印象的である。

○生徒 M.S (健康と福祉探究ゼミ)

【平均値】 1.70 (1年4月) →4.60 (3年10月)



双葉郡外から本校に通う、アカデミック系列の生徒である。手足の筋力低下や感覚の低下などが起こる難病により、装具を装着しており周囲と同じペースでの歩行や運動は困難である。小中学生の頃に、周囲に自らの病気が理解されていないと感じた経験があり、障害や難病を持つ人たちがよりよく生きることについて強い問題意識を持って、高校3年間試行錯誤しつつも意欲的に探究活動に取り組んできた。1年次には、障害や難病を持っている子どもたちが普通学級で過ごすための手段として自分マニュアルの作成を提案、2年次・3年次には障害や難病を持っている人も含めた全ての人に防災意識を持ってもらうことを目標に活動を行ってきた。

1年次のルーブリック評価の平均値は1.70(4月)、1.50(11月)とかなり低い。しかし、2年次6月に4.20と大幅に伸び、10月には3.00に下がったものの、その後は3年次5月に4.30、9月に4.60と順調に伸び続けている。2年次6月に数値が伸びた原因としては、ゼミ活動が本格的にスタートし、福祉科の教員や大学教員から福祉や健康分野についての講義を受け、探究活動への意欲が高まったことが考えられる。しかし、防災や福祉に関する調査活動は行うものの、問題解決のためのアクションになかなか踏み出せない期間が数か月続いた。授業後に記入するコメントシートの記述でも「アクションが決まらない」「何もやりたくない気持ちが大きい」という感想が見られた。12月には教員から、いきなり大規模なイベントを企画しようと思わず、自分ができるこ

とから始めるよう声かけを行っている。この時期の探究活動での迷いが、2年次10月の値の低下に反映していると考えられる。

2年次の終わり頃に、他ゼミの生徒とともに、校内の避難訓練の改善案と防災に関するワークショップを企画することになり、実行に移してからは、学校内外で様々なアクションを起こすようになった。

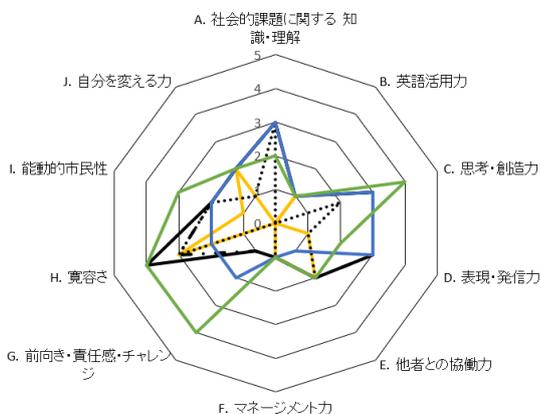
探究活動を通して、面識のない外部の方に自分から連絡をとる、イベントを一から企画する等、様々な体験を積み重ね、自分の行動が周りに多少なりとも変化を促すことができるという実感を得ることができた。また、学校内外で発表する機会が多く、プレゼンテーション能力も向上した。このような成長を実感したことが、3年次の数値として表れたのではないかと考えられる。特に「C. 思考・創造力」「D. 表現・発信力」「G. 前向き・責任感・チャレンジ」「I. 能動的市民性」の4項目の数値の上昇は顕著である（1年次4月：1→3年次9月：5）。

し、3年次初めは、新型コロナの影響でイベント欠席、中止など課題解決のためのアクションが計画通りに進まず、活動が制限されたため、若干評価（2.00）が低くなった。しかし、その後の地域交流イベント参加をきっかけに、自分で問題点を見つけ、解決策を考えることの大切さを学び、自分自身が主体となり活動することで、ルーブリック評価「C. 思考・創造力」「G. 前向き・チャレンジ」の項目が1年次（0.00）から3年次で（4.00）大きく上昇した。

○生徒 M.M（健康と福祉探究ゼミ）

【平均値】1.10（1年4月）→2.50（3年10月）

— 1年4月 …… 1年11月 - - 2年6月 — 2年10月 — 3年5月 — 3年9月



南相馬市から本校に通うスペシャリスト系列（福祉）の生徒である。福祉科目の授業で地域交流の重要性を学び地域交流について興味を持ち、世代間交流を通して、子ども・高齢者・障がい者など地域の住民全員がお互いに助け合える共生社会を目指すことをテーマに、探究活動を行った。

1年次のルーブリック評価の平均（1.10）は低く、2年次（2.10）、3年次（2.50）と徐々に評価が高くなっている。これは、2年次での調査アクションにおいて、地域交流イベント実施状況や地域の高齢者や子どもの日常生活の様子を詳しく知ることができ、次の課題解決のためのアクションへの道筋ができたからと考えられる。しか

4. 4 3年間を通した各取組に関する評価

本校で探究に関連する科目（産業社会と人間、総合的な探究の時間（未来創造探究））や海外研修について、生徒がどのように捉えてきたのか、6期生に対してアンケートを行った。（実施時期：令和4年11月、回答生徒数：125人）

意識調査

以下の表に示す内容について探究の授業についての意識調査を行った（実施時期：令和4年11月、回答生徒数：125人）。Q1～Q3は地域との関わり、Q4～Q6は探究と教科の関わり、Q7～Q11は自分自身と社会との関わりについてである。

表 調査項目と結果（数値は回答の割合）

（4：とてもそう思う 3：そう思う

2：あまり思わない 1：全くそう思わない）

	質問項目	R 4				昨年比 肯定的評価
		4	3	2	1	
Q1	探究授業を通じて、地域に対する興味関心が高まった。	34.4%	58.4%	4.8%	2.4%	-7.2%
Q2	探究授業を通じて、自分と地域とのつながりが増えた。	37.1%	47.6%	12.9%	2.4%	-1.0%
Q3	探究授業を通じて、地域のことが好きになった。	28.8%	56.0%	12.8%	2.4%	-5.0%
Q4	探究授業を通じて、探究学習で学んだことと、教科学習で学んだこととのつながりを感じるようになった。	20.8%	56.8%	20.0%	2.4%	2.1%
Q5	探究授業を通じて、探究学習に教科学習で学んだことを活かせるようになった。	22.4%	55.2%	19.2%	3.2%	-1.9%
Q6	探究授業を通じて、教科学習の必要性を感じるようになった。	21.6%	56.0%	18.4%	4.0%	-8.1%
Q7	探究授業を通じて、世界や日本で起こっている課題を自分の身近に感じるようになった。	38.4%	50.4%	9.6%	1.6%	-1.0%
Q8	探究授業を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった。	40.8%	40.8%	14.4%	4.0%	-16.4%
Q9	探究授業を通じて、自分の考えや意見が深まった。	46.3%	43.1%	8.9%	1.6%	-8.6%
Q10	探究授業を通じて、自分のことが好きになった。	20.8%	29.6%	40.0%	9.6%	-2.6%
Q11	探究授業を通じて、自分が動けば社会は変えられると思った。	24.0%	50.4%	22.4%	3.2%	5.0%

ほぼ全ての項目について肯定的意見（3，4）を半数以上の生徒が回答しているが、昨年度との比較からの数値が低下している。向上した数値としては、Q4「探究学習と教科学習のつながり」とQ11「社会を変えられる」である。「グローバル型」指定期間では、「教科学習と探究学習の往還関係を強化する」ことを目的としていたので、その数値の向上は肯定的にとらえたい。

ほとんどの項目は例年通り8割以上が肯定的評価となっているが、Q8「探究学習を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった」という数値が-16.9%と大きく下落している。例年9割近い生徒が肯定的な数値であったため、この要因としては探究をつづけるモチベーションと進路学習が乖離しており、別個のもととして考えていることが考えられる。次年度については、セルフエッセイや3年間の学びの軌跡を振り返らせることで、探究と進路活動の連動した指導体制の構築について検討していく必要がある。

取組別評価

1～3年の間に実施してきた主な取組を示し、その中で印象に残った取組、力がついた取組を調査した。結果を下表に示す。

表 印象に残った取組、力がついた取組（数値は人数）

	項目（複数回答可）	印象に残る活動	資質・能力向上につながる活動
A	1年次 出張みらいラボ（オンラインカタリ場）	5	3
B	1年次 ブチ探究	5	4
C	1年次 双葉郡バスツアー	5	4
D	1年次 マインドマップ講座	1	4
E	1年次 演劇ワークショップ	26	49
F	1年次 SDGsワークショップ	1	0
G	1年次 しくじり先生	44	17
H	1年次 探究ワークショップ	1	1
I	1年次 ヒューマンライブラリー	1	1
J	2年次 探究オリエンテーション（未来創造探究）	0	1
K	2年次 3年生の中間発表会	12	8
L	2年次 問いづくり講座	4	3
M	2年次 GWの調べ学習	7	1
N	2年次 ゼミごとに分かれての活動	9	4
O	2年次 木3: 社会を社会科の視点で考える	0	0
P	2年次 木3: 処理水	1	0
Q	2年次「地域・社会のあるべき姿」検討	0	1
R	2年次 ゼミ内報告会	0	0
S	2年次 プレ発表会	2	1
T	2年次 5期生の未来創造探究発表会	2	5
U	2年次 セルフエッセイ	17	7
V	3年次 中間発表会	36	20
W	3年次 最終発表会	0	34

回答については複数回答も可としてアンケートを行っており、平均すると一人あたり2.5個程度（昨年平均2.6個）回答している。印象に残った取組と力がついた取組で数値は似通っている。今年度の傾向として、印象に残っている学習として「しくじり先生」をあげる生徒が多かった。生徒のルーブリックから「前向き・チャレンジ」の項目が低いところ所から立ち上がった企画だったため、十分目的を達成できたと考えられる。

4. 5 進路や在り方生き方への影響に関する評価

探究活動が卒業時の進路や在り方生き方にどのような影響を与えたのか調べるために、3年次生徒にアンケートを行った。なお、このアンケートは平成30年度から始めており、今年度が5回目である。

実施日：令和5年2月

対象生徒：6期生3年次生徒 103人

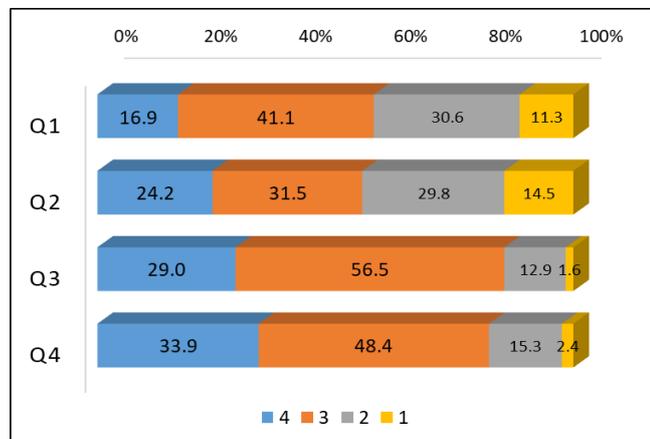
内容：以下のアンケート項目に対して、1~4の4観点で選択、さらに具体的事例などを記述で回答。

結果：

踏4発*		4	3	2	1
◀ 〓 - 休2億僚下僚了⑨ □ ④監 ②⑧半分ヲ⑩修テ④bar巧弊儻⑤ 半井⑥倭⑦(名)監(九)	- 3歳探	16.9	41.1	30.6	11.3
	53歳探	25.2	41.7	25.2	7.8
	43歳探	23.4	42.3	27.9	6.3
◀ 〓 - 休2億僚下僚了⑨ □ ④監 ⑥ 2線一橋世⑩線一橋世⑤②⑧ (名)監(九)	- 3歳探	24.2	31.5	29.8	14.5
	53歳探	25.2	32.0	22.3	24.3
	43歳探	32.7	33.6	20.9	12.7
◀ 〓 - 休2億僚下僚了⑨ □ ④監 (十)秘23十 一④②③四(九)祭(至)課 (月)至(二)月監(二)九十④キ。ズ(財)日② ⑤堂(十)⑧(名)監(九)	- 3歳探	29.0	56.5	12.9	1.6
	53歳探	27.2	60.2	9.7	2.9
	43歳探	31.3	57.1	10.7	0.9
◀ . - 休2億僚下僚了⑨ □ ④監 (十)加キ。⑩lm札价⑥PM(六)特(日)②⑤ 堂(十)⑧(名)監(九)	- 3歳探	33.9	35.2	26.2	9.7
	53歳探	28.2	59.2	9.7	2.9
	43歳探	35.7	54.5	8.9	0.9

- 4 大きく影響した (繋がった・活用した)
- 3 ある程度影響した (繋がった・活用した)
- 2 あまり影響しなかった (繋がらなかった・活用しなかった)
- 1 全く影響しなかった (繋がらなかった・活用しなかった)

表中の値は割合 (%) である。



Q1、Q2については高卒時の進路選択、いわば短期的な進路について、探究活動の影響があったかどうかについてのアンケートである。Q1では59% (昨年67%) の

生徒が進路選択に影響があったと回答している。またQ2においても6割近くの生徒が試験に探究活動を活用したと回答している。4期生、5期生と比較して、Q1は肯定的評価は引き続き定着しており、Q2では6期生は例年よりも一般受験にチャレンジしている生徒が多いため、数値は下がった。しかし、生徒の記述コメントからは探究が具体的に進路指導に結びついている例が多く見られた。「面接で探究のことを語った」や「受験のプレゼンで探究の発表が役に立った」というコメントが多く見られた。

Q3、Q4は長期的な観点から、社会との関わりや自身の在り方生き方に関するアンケートである。いずれも抽象度の高い問いであるにも関わらず例年8~9割の生徒が肯定的に捉える結果となったが、今年度についてはQ3、Q4ともに数値が下がり、85%程度となった。「いろんな人たち知関わり、様々な価値観を知った。そのうえで、自分の価値観を考えることができた」など肯定的なコメントもある一方で、「高校生活があと2年続くのなら、変わったと思う」というコメントもあった。6期生は入学時よりコロナ禍の3年間だったこともあり、探究学習も思い通りにいかなかったことも多かった。この影響は、大人が考えている以上に高校生に多大な影響を及ぼしているように思う。

また、Q3、Q4の質問について、肯定的な評価(4・3)を選ぶ生徒について、アカデミック系列の生徒が肯定的な評価をする比率が高い傾向が多かった。また、系列に限らず、探究学習を通じて、地域復興への意識がめばえ、地元に対しての愛着や地域に貢献したいとのコメントが多く見られた。

高校生と社会の関わりを問う『18歳意識調査「第20回 -社会や国に対する意識調査-」(日本財団、2019年11月) (<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2019/20191130-38555.html> 2023年3月閲覧)と本校生の今回のデータを比較すると、本校生は社会に対する課題意識を明確に持ち、社会に積極的に関わろうとする意欲が高いことが特徴といえるであろう。

	自分を大人だと思う	自分は責任がある社会の一員だと思う	将来の夢を持っている	自分で国や社会を変えたいと思う	自分の国に解決したい社会課題がある	社会課題について、自分や身近な人々と積極的に議論している
日本	29.1%	44.8%	60.1%	18.3%	46.4%	27.2%
インド	84.1%	92.0%	95.8%	83.4%	89.1%	83.8%
インドネシア	79.4%	88.0%	97.0%	68.2%	74.6%	79.1%
韓国	49.1%	74.6%	82.2%	39.6%	71.6%	55.0%
ベトナム	65.3%	84.8%	92.4%	47.6%	75.5%	75.3%
中国	89.9%	96.5%	96.0%	65.6%	73.4%	87.7%
イギリス	82.2%	89.8%	91.1%	50.7%	78.0%	74.5%
アメリカ	78.1%	88.6%	93.7%	65.7%	79.4%	68.4%
ドイツ	82.6%	83.4%	92.4%	45.9%	66.2%	73.1%

参考資料：18歳意識調査「第20回 -社会や国に対する意識調査-」(日本財団)

4. 6 学校アンケートによる評価

本校の教育活動全般を評価するため、毎年1回、保護者、生徒、教員によるアンケートを行っている。このうち、本事業に関係するものについてピックアップした。

対象：本校舎高校1～3年の生徒、保護者、教員

回答数：保護者207名、生徒267人、教員75人

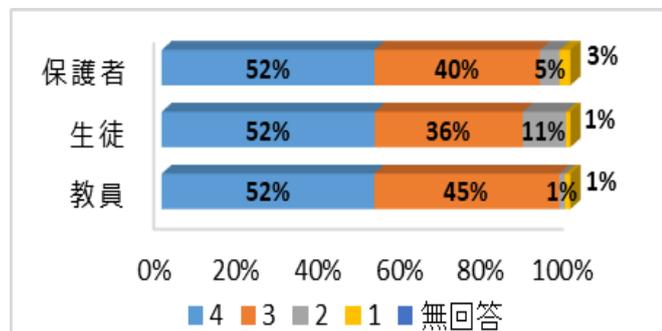
回答：以下の4段階および無回答による回答

4：思う 3：ある程度思う

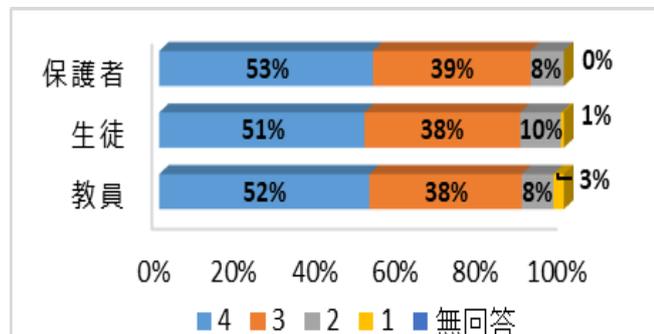
2：あまり思わない 1：思わない

アンケート項目と結果：

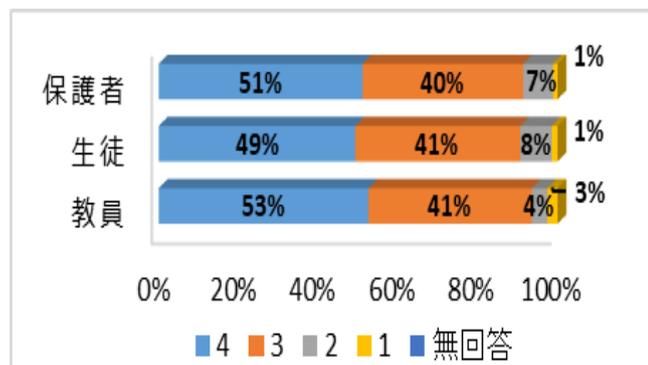
Q1 アクティブラーニングをはじめ、探究する力を育てる充実した授業が行われている



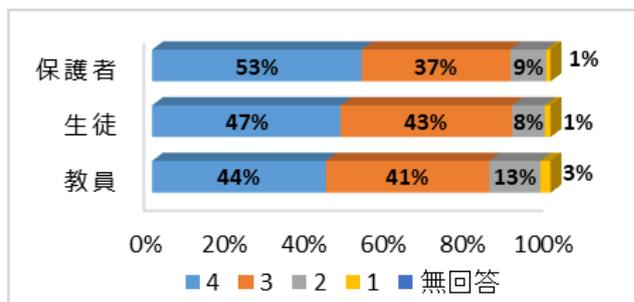
Q2 地域の課題に向き合う授業や活動が行われている。



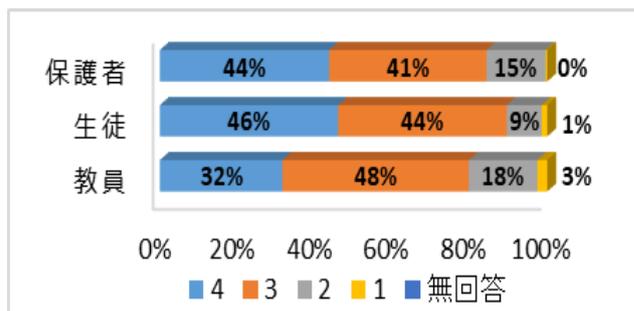
Q3 地域の課題に取り組むために、地域の方々や国内外の様々な組織と連携している。



Q4 地域の課題に向き合う授業や活動が、復興を目指す地域にとってプラスになっている。



Q5 地域だけでなくグローバルな視点 (SDGs など) を持てるような取組が展開されている。



回答いただいた保護者、生徒、教員、いずれも肯定的意見が非常に高く、本事業の取組は高く評価されている。Q1をみると、生徒・保護者ともにアクティブラーニングや探究する力を育てる授業がふたば未来学園の取り組みと認知されている様子が見える。また、保護者の肯定的評価が92% (昨年56%) から急上昇しており、本校の探究学習の成果が地域の方々にも浸透した結果と言える。

Q2については地域の課題に向き合う授業や活動が行われているかの項目である。保護者・生徒・教員ともに90%近くが肯定的な評価をしており、昨年よりも向上している。また、生徒の否定的な評価も5%減少している。

Q3は外部連携の状況についてのアンケートである。昨年度の保護者・生徒・教員の肯定的評価(約80%)から90%近くに上昇し、コロナ禍にあっても協働的な学習を行う着実に進めることができた。

Q4は探究活動の地域へ与える効果についてである。この質問についても肯定的意見が8～9割ほどである。教員の肯定的意見が昨年より6%向上しているが、3者のなかで一番低くなっていることは残念である。生徒が実践している内容は地域の復興にも寄与することも教員間で目線合わせをする必要がある。

Q5はグローバルな視点についてである。特に生徒からの評価が昨年度比10%アップし、生徒の海外研修や海外留学に積極的にチャレンジしている生徒が増えている。学校評価アンケートについては、今年度についてはどの数値も昨年より肯定的評価が微増している。

4. 7 設定した目標の達成度

本事業で設定した目標と今年度の達成度について以下に示す。またそれぞれの項目について以下にまとめる。

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）							
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)	
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値						単位：なし	
a	本事業対象生徒：	2.63	3.10	2.62	2.90	3.03	3.5
	本事業対象生徒以外：						
目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的を実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。							
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上						単位：%	
b	本事業対象生徒：	83.2	84	89	87.4	63.4	70
	本事業対象生徒以外：						
目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もおり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。							
(その他本構想における取組の達成目標)							
本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合						単位：%	
c	本事業対象生徒：	調査なし	67	88.5	90.0	70	
	本事業対象生徒以外：						
目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。							
2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）							
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)	
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)							
地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数（3年次生）						単位：件	
a		31	40	52	60	69	50
目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の1年間を対象とする。							
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)							
視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数						単位：件	
b		調査なし	調査なし	178	192	376	250
目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。※ただしコロナ禍の状況で未確定な要素が大きい。							
(その他本構想における取組の具体的指標)							
生徒の外部発表、コンテスト応募件数						単位：件	
c		調査なし	35	42	44	55	45
目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。							
3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）							
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)	
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)							
本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数						単位：件	
a		150	165	301	310	321	200
目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。※ただし、コロナ禍の状況であるため、オンラインでの対応活動指標に含めることとする。							
(その他本構想における取組の具体的指標)							
d							
目標設定の考え方：							

1a 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値

本校の開校以来、ルーブリックの最終調査における平均値は以下の表のように推移してきた（詳細は5.1参照）。

1期生 H29卒	2期生 H30年卒	3期生 H31年卒	4期生 R2年卒	5期生 R3年卒	6期生 R4年卒
1.99	2.63	3.10	2.62	2.90	3.03

1～3期生まで値が順調に伸びていたが、4期生は3期生よりも低下した。5期生はそこから2.90まで上昇し、6期生で3.03まで上昇した。本事業の最終年度では「3.5」以上を目指しており、最終的に目標を達成することはできなかった。目標設定上、かなり野心的な数値ともいえるが、ルーブリックを策定して「変革者」を育てる本校の目標としてはやはりルーブリックレベル3.5はめざしていきたい数値ともいえる。生徒は年次が上がるにつれ評価が高くなり、探究活動も自走できるようになっていくが、一部、レベル0や1の評価のままの生徒もおり、そのような生徒について指導を手厚くする等、丁寧な伴走、指導を教員側で心掛けたい。その意味において、ルーブリックを「形成的評価」として活用したり、生徒と定期的に面談等を行ったりすることがより重要となる。

1b 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合

この項目については2期生からアンケートを行っており、今年度の調査で5回目となる（詳細は5.5参照）。ここでは以下の2つのアンケートの平均を指標としている。
Q③未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？
Q④未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？

今年度、肯定的意見の割合は、Q③では85.5%、Q④では69.0%、平均77.26となり、目標の70%を上回った。しかし、過去5回実施しているなかで毎年90%近くを推移していたが、今年度はQ④の数値が10%近く低下している。6期生は探究学習が生徒の生き方・在り方の模索につなげている生徒が多いと考えていたため、意外な結果となった。コロナ禍のことなども原因として考えられるが、この数値の原因について企画研究開発部内で検討していきたい。

1c 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見

の割合

例年実施している学校評価アンケートのなかに、昨年度より本事業に関連する項目を追加した（詳細は5.6参照）。5つのアンケート項目のうち、肯定的意見（3および4の回答）について各アンケートの平均をとり、この値で評価することとした。結果としては90.0%（昨年72.7%）となり、昨年度に引き続き70%の目標を超えた。5項目のアンケートのうち、「主体的・対話的で深い学びをはじめ、探究する力を育てる教育」の項目で昨年より36%増となり、本校の探究を中心とする授業がようやく保護者にも定着してきたと考えられる。また、同様に地域の課題に向き合う授業とともにグローバルな視点を持つ取り組みについて数値が2%向上しており、本校でのグローバルリーダーを育成するための教育活動が理解されつつある状況である。

2a 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数

本校の課題探究は、地域に関わるテーマとすることを基本としている。ここではそのうち地域の方と連携、協働しながら進めるテーマ数を取り上げることとした。今年度、3年次の課題探究のプロジェクトのうち、これに該当するものは69件あり、目標としている50件以上を達成することができた。6期生は人数が多く（125名）、個人による探究プロジェクトが多いためこのような数値となった。また、高校1年次後半より探究が本格実施となり、高校2年次や中学生の探究プロジェクトを含めると常時300以上のプロジェクトが動いており、学校全体としても探究学習の活性化が顕著である。

2b 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数

本校への来校者数は令和2年度から調査カウントを開始した。今年度もコロナ禍も来校者がいない時期（4・5月）もあったが、6月から12月にかけては視察が集中し、最終的に376名の方に来校いただいた。また、今年度は2月に「グローバル型」研究成果発表会を実施し、県内外から137名の方が外部から参加された。本校の探究学習が県内外から注目されていることから、本校の教育活動が今後も積極的に外部の視察を受け入れ、本校の教育活動の他への普及に寄与したい。

2c 生徒の外部発表、コンテスト応募件数

今年度の具体的な取組を以下に示す。件数は最終的に55件となり、今年度の目標である45件を上回ることがで

きた。今年度の成果としては、

- ・第21回福島県総合学科高等学校生徒研究発表会(1月、本校から3件発表<口頭発表部門1、展示部門2>)
- ・マイプロジェクトアワード福島 summit (1月、福島県内高校生対象の発表会、本校から14件応募、このうち1件が福島県代表として全国 summit へ進出)
- ・マイプロジェクトアワード全国 summit (3月、福島県代表として1発表。)
- ・第10回ふくしま学(楽)会(7月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から2件発表。)
- ・第11回ふくしま学(楽)会(1月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から1件発表。広島研修で学んだ生徒たちを中心に発表を行った。)
- ・ふたばアワード(11月、1~3年による学年横断型の地域課題探究発表会、14発表)
- ・ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト(8月、福島県内高校生対象の発表会、本校から4件応募、最優秀賞1本、優秀賞1本、社会貢献賞2本)
- ・全国高校生フォーラム(12月、オンライン)
- ・STEAM フェスタ(3月、2本発表)
- ・日本地理学会春季学術大会(3月、東京都立大学)にて、高校生ポスターセッションに参加

3a 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数

第2章に詳細を示したが、今年度、本校の探究活動関連でお世話になった方は321件(3月15日現在)となっており、今年度の目標(300名)と昨年の実績310件をやや上回った。探究活動の特定のゼミの連携数が突出しているという面もあるが、概ねどのゼミにおいても地域や外部の方との連携は進んでいる。「グローバル型」指定期間からコンソーシアムが立ち上がり、早稲田大学とのつながりから外部の専門家ともつながることができ、外部連携を推進する環境が整ってきた。引き続き、外部の方の協力も得ながら活動の活性化を図りたい。グローバル型指定から2年で数値が倍増し、学校と地域の連携が質的にも量的にも深化していることが表れている。

また、本校の活動に関わっていただく講師については、今までのように一度来ていただき講義を頂くという形ではなく、オンラインや対面で断続的に複数回を長期間にわたり関わっていただく状況が多く生まれてきている。

そのため、のべ件数をカウントすることが難しくなっていることから、新たな指標の設定が必要となっている。ただ、どのような指標を設定すれば生徒の探究学習と地域人材との密接な関わりを正しく測定できるかについては、今後も継続的に企画部内で検討していく必要があると考えられる。